

## 232. $^{123}\text{I}$ による甲状腺シンチグラフィの 臨床的検討について

東京女子医科大学 放射線科

牧 正子 大須賀澄江 日下部きよ子

山崎統四郎

内科

鎮目 和夫

短半減期核種である  $^{123}\text{I}$  を用いて各種甲状腺疾患にシンチグラフィを施行し検討した。

〔対象〕各種甲状腺疾患23例。(結節性甲状腺腫7例, 甲状腺癌5例, 甲状腺機能亢進症3例, 甲状腺機能亢進症の疑われるもの5例, 慢性甲状腺炎2例, 亜急性甲状腺炎1例)

〔投与量〕 $^{123}\text{I}$  を  $100\mu\text{Ci}\sim 3\text{mCi}$  経口投与した。

シンチグラフィ開始時間は  $^{123}\text{I}$  投与後1~6時間であり, 症例によっては24時間後のシンチグラフィを追加した。

一部の症例では全身シンチグラムを得た。

また  $^{123}\text{I}$  と同様短半減期核種である  $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -パーテクネイトによるシンチグラムとの比較検討を行った。

装置は5インチピッカーマグナスキャナ, 5インチ日立全身スキャナ, ピッカーダイナカメラを用いた。

〔結果〕 $^{123}\text{I}$  経口投与後1時間前後では身体バックグラウンドが高いが3~6時間(~24時間)では良好なシンチグラムが得られた。

$^{123}\text{I}$  投与量は  $500\mu\text{Ci}$  前後で良好なシンチグラムが得られたが甲状腺癌転移巣の検索や亜急性甲状腺炎の場合には  $\text{mCi}$  量の投与が望まれる。一方  $100\mu\text{Ci}$  前後の投与量でも従来  $^{131}\text{I}$  によるシンチグラムと同程度のイメージが得られた。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$  パーテクネイトと比し明らかに良好なシンチグラムが得られた。